



#43

珈琲飲んで♪ ねんねして♪

著: 藍澤たすく

イラスト: かもめ遊羽

「気まずい……」

手許のグラスを拭きながら、羽柴翔希はちらりとまた店の角にあるボックス席を盗み見た。そこには先ほどから黙って珈琲を楽しむ女性客が二人、向かい合って座っていた。

一人は全身白衣、もう一人は全身黒衣というこれ以上ない完璧なコントラストを成している。白衣の女性はゴトウ・カールツァイト・ミキという。

この「喫茶かなりあ」の隣に建っている「カールツァイト総合研究所」の所長であり、自ら研究・開発を行う科学者でもある。

何を研究・開発しているのかが一切謎なのがちょっと気になる場所ではあるが……。そしてその向かいに座る黒衣の少女は、ミキの助手である翹田雲母だった。

背が低く、全体的に幼児体形のミキとは対照的に、モデルのような高身長と、出るところは出て、ひっこむところはしっかりと引つ込んだナイスボディを誇っている完璧な美少女だった。

端的に言って翔希は、常連客であるこの二人が苦手だった。

二人とも容姿端麗と言ってよく、実際、店の前を通る人が彼女たちに見惚れて立ち止まることも少なくない。日によってはそれが人だかりになる時もあるぐらいだ。

しかしそれでも翔希は彼女たちが苦手だった。

（なんつーか、取りつくしまがないっていうかな……独特の雰囲気っていうかな……大体いっつもずーっと黙ってるしな……）

翔希はカウンターのグラスを慣れた手つきで並べ直した。

今日は店長が不在で、バイトの自分がこの店の一切を任されている。幸いにも客はミキと雲母の二人しかいないので、忙しくて困る……ということはないが……。

「む」

ミキが急に眉根を寄せた。

「どうしました、博士？」

雲母が淡々とした調子でミキに問いかける。

「すまん、ちょっと急用を思い出した。すぐ戻るから雲母はここで待っていたまえ」

「かしこまりました」

言うが早いのか、ミキはそのままさっさと店を後にしてしまった。

ドアベルが、からんころんと軽快な音を立てる。

店内に残されたのは翔希と雲母のみ。気まずさ150%アップである。

気まずさ150%アップではあるが、そろそろ注文されたシフォンケーキを席まで届けなければならぬ。

「はあ……」

翔希は少し長い溜息をついたあと、これも仕事だと思い直してトレイにケーキを乗せた。

「お待たせしました」

翔希が慣れた手つきで雲母の前にシフォンケーキを置く。
雲母は小さく会釈をしてそれに応える。
そして翔希がボックス席を離れた瞬間。

ポコッ……ドサツ……

翔希の背後で、腹に響く、鈍い嫌な音がした。
慌てて振り向くとそこには信じられないような惨事が展開されていた。

雲母がテーブルに突っ伏してびくりとも動かなくなっている。

見るとテーブルの脇に30cmほどの大きさの石像が落ちていた。

やたら誇張された目鼻立ちと大きくあけられた口が不気味な可笑しさを纏っている。

旅行好きの常連客のみやげ物で、確かアフリカかどこかのものだったはずだ。

おそらくこれがテーブルの横の食器棚の上から落下して雲母の頭を直撃したのだろう。

「大変だ……！」

翔希は慌てて雲母の許に駆け寄った。

光を失った瞳を見開いたまま、雲母はまったく動く気配もない。

翔希はおそろおそろ首の頸動脈に指を触れる。脈はまったく感じられなかった。

「し、死んでる……」

翔希は腰を抜かしてその場にへたり込んだ。

ど、どうしよう？ きゅ、救急車？ それとも警察？ でもこれでもしかして僕が業務上

過失致死に問われるパターンじゃないの？ そうすると最悪刑務所行き……？

様々な思考がとりとめもなく一気に翔希の脳裏を駆け抜ける。

その時。

「うおーい、客だぞー誰もいねーのかーこの店はー！ おーきゃーくーさーまーだーぞーおーきゃーくーさーまー！」

「うあああああつ、た、ただいま参ります！」

入口のドアベルを必要以上からんころんさせながら、茶髪の女性が怒鳴り声を上げていた。
彼女もこの「かなりあ」の常連である。

名は君山撫子という。

が、名前には全く似つかわしくない風貌で、彼女は無造作に伸ばされた茶髪をぼりぼりと掻きつつ、いつものように行儀悪く煙草をふかしながら店に入ってきた。

「いらっしやいませ……って、酒くさっ!？」

あまりのアルコール臭に翔希は思わず鼻をつまんだ。

「んだら、翔希、その態度は!? お客様は神様だろーが！ ひっく!」

「……君山さん、また朝まで飲んでたパターンですね？」

「あたぼうよ！ あたしや、宵越しの金は持たねーんでえい！ ひつく！」

撫子は異様にご機嫌な様子だった。

そして翔希の制止もきかず、千鳥足でいつものボックス席に座ってしまった。

「ん？」

撫子の酔眼すいがんが隣のボックス席で突っ伏す雲母をとらえた。

「んだ？ あのねーちゃんも飲みすぎで潰れてるんかい？」

「あ、ああ、そうみたいですな」

翔希は慌てて適当に相槌あいつちを打つ。そして撫子に気づかれないように足許に転がる石像をそつ

と後ろのテーブルの下に押し込んだ。

「そーゆー時は迎え酒が一番いーんだよ、ねーちゃんよー！ よし、判った！ あたしと一緒に飲もう！」

撫子がふらふらと雲母の許に行こうとしたので、翔希は慌ててそれを引き留めた。

「ご、ご注文はいつものガーリックエビピラフでよろしいですね!？」

「おーよ！ あたしや飲んだあとの締めはいつつものこのピラフと決めてるんでーい！」

強引にもとのボックス席に押し戻された撫子は、それでもご機嫌な様子でそう答えた。

「すぐ作って持ってきましたんで、くれぐれもそこから動かないでくださいね！ 絶対に動かな

いでくださいね！ 何があっても絶対ですよ！」

「あいよー、ニンニクいっぱい効かせてくれよな〜」

「判りました！ 判りましたから、本当に死んでもそこから動かないでくださいね！」

翔希は顔中に大量の汗を浮かべながら、急いで厨房へと入っていった。

「……んしょっと♪」

翔希の姿が見えなくなるやいなや、撫子はさっそく雲母の横に腰を下ろした。

「ほらー、起きろよ、ねーちゃん。一緒に一杯やろーぜ。……ん、あんたよく見たらいつもミキのやつと一緒に来てる巨乳のねーちゃんじゃん。確かウララ……ん？ クララ……だつたっけか？ まあ、どっちでもいいや。うっほお、近くで見たら本当に乳でけくなく、ねーちゃん！」

撫子が雲母の背後から両乳をわしづかみにする。

しかし雲母はびくりとも反応しない。

「なんだよ〜ノリ悪いなあ〜クララあ〜なんとか言えよ〜」

あまりに無反応な雲母にちよつと腹を立てて、撫子がさらに強く乳を揉みながら左右に体を揺すった。

「あつ……」

酔っているせいか、平衡感覚が狂った撫子は雲母を抱えたまま椅子から落ちてしまった。

体勢が悪かったため、まるで雲母にバックドロップをかますような落ち方になってしまっ
 「あっ、わりーわりー。わざとじゃねーんだ、わざとじゃ……」

そこまで言って撫子は息を呑んでフリーズした。

床に横たわっている雲母の首が変な方向に曲がっている。

普通の人間ならあり得ない、正面から180度近く後ろを振り返る形だ。

これは……完全に首が折れている……！

「あ、あわわわ……」

撫子の酔いが一気に醒める。

「ガリークエビピラフ、今お持ちしますね〜！」

「ひーっ!？」

厨房から聞こえてきた翔希の声に、撫子は全身を縮毛立たせた。

「ま、まずい！ あいつが来る前に早くこれを隠さないと……!？」

撫子は急いで雲母の体を持ち上げると、酔っ払いは思えない迅速な動作で、3つ隣のボックス席に見えないように彼女を横たわらせ、そのまま食わぬ顔で最初の席に戻った。

「はい、ガリークエビピラフお待たせしま……あれ?」

撫子の前にピラフを置いた翔希は雲母の姿がないことに気がついた。

「あの……あそこの席に座っていた雲母さんは……」

「帰った!」

翔希のセリフに食い気味のタイミングで撫子が叫んだ。

「帰っ……た……ですって……?」

「お、おお！ なんか急用を思い出したって言って慌てて出てったぞ！ あ、そうだ、これで会計してくれてあたしが1万円預かったから!」

撫子が顔中に汗をかきながら、急いで自分の財布から諭吉を取り出した。

しばしの静寂。

「あの……本当に、帰ったんですか……? 自分の足で……?」

翔希が青ざめた顔で聞き返してくる。

気のせいかその全身が小刻みに震えているようだ。

「あ、ああ！ 間違いなく帰ったぞ！ ……なんだその顔は、疑ってるのか!? あたしが酔ってるから信用できねーってのか!？」

「い、いや、そうじゃなくてですね……確かにさっき雲母さんの脈は……」

ドサッ……

その瞬間、撫子の置き方が浅かったせいか、雲母の体が3つ隣のボックス席から床に転がり

落ちた。

変にねじれた首の上から、虚ろな瞳が翔希と撫子を見つめている。

「ひーっ!?!」

翔希と撫子は同時に悲鳴をあげた。

「な、なんで雲母さんがあんなところに!?!」

「ち、違うんだ、翔希! あ、あたしは殺すつもりなんてなかった……!」

取り乱す二人。

その時。

からんころんからん♪

入口のドアベルが鳴った。

入ってきたのはミキだった。

「すまない。待たせたね、雲母くん。……ん?」

さきほどの席に戻ろうとしたミキは床に転がる雲母と、青ざめた顔で涙ぐむ翔希と撫子の二人をかわるがわる見つめた。

やがてミキの眉間にビシツと深い皺が刻まれ、彼女は足早に雲母の許に駆け寄った。

「雲母くん!?! 雲母くんー!!」

ミキが雲母の upper body を抱き起こして懸命に呼びかける。

もちろん雲母からは何の反応もない。

すべてが終わった——翔希と撫子の二人ともが、そう覚悟して天を仰いだ瞬間。

「あ、博士。お早かったですね」

雲母が捻じれた首のまま、ミキに話しかけてきた。

「——!?!」

信じられない状況に、翔希と撫子は無言の叫びをあげる。

あまりの恐怖にもはや声も出ないようで、二人は抱き合ったままガタガタと震えている。

「うむ。どうやら生体機能に問題はないようだね。なんらかのショックで後頭部の H A L T ボタンが押されて一時停止状態になっただけらしいな。それにしてもおかしいな、よほどの力がかからないとあのボタンは作動しないはずなんだが……」

ミキは雲母の頭を丁寧に観察すると、他には何も問題ないと確認できたようである。安心してほっと一息ついた。

「でも首のパーツは念のため点検したほうがいいだろうから、一回抜いておこうか」

「はい、博士」

言うが早いのか、ミキは雲母の首を胴体から引っこ抜いた。

「……!?!」
翔希と撫子、再び無言の絶叫。

なんだ。これは一体何が起きているんだ……!?!
「あ、あの、ミ、ミキさん、こ、これは……?」

翔希が絞り出すような声で雲母の生首を指し示す。

「ああ、そうか。君たちにはまだ話していなかったね。雲母くんは私が開発した有能なアンドロイドの助手なのだ」

「アンドロイドー!?!」

「はい。わたくしは博士に開発していただいた優秀なアンドロイドの助手なのです」
雲母がいつもの感情のこもらない声で淡々とオウム返しをする。

「なあーんだ、そうだったのかあー……」

撫子は恐怖と緊張から解き放たれたせいか、その場にへなへたと座り込んだ。

「あたしが殺したわけじゃなかったんだー……」

「え? 君山さん、今、なんか言いました?」

「あ? いや、何も言っていない! あたしは何も言っていないぞ!」

怪訝な顔で覗き込んでくる翔希に、撫子は慌ててばたばたと両手を振った。

「さて。ではお茶の続きといこうか」

「え?」

当たり前のようにそう告げるミキを、翔希と撫子は呆然と見つめるのだった。



喫茶「かなりあ」の前には、いつものように人だかりができていた。

しかしそれはお馴染みの「お茶をする美少女二人に見惚れた男たちの集団」ではなく、「喋る生首を前に平然と珈琲を楽しむ美少女」に驚愕する人々の群れであった……。

喫茶「かなりあ」は今日も平和である。

おしまい